

児童画の図式

人物画におけるその特殊性について

谷野正敏

The Patterns of Children's Pictures

— The Characteristics in Their Portraits —

MASATOSHI YANO

緒言

幼児から小学校入学初期までの児童の絵は、視覚言語性が強く、意志を伝達する記号であると言われる。もっとも、にぎる・しゃぶる・ひっかく・ひっぱる等の行動によく似たぬたくり書きもあるが、それはまだ低次の段階で本能的である。造形教育が望ましい人間形成のための教育分野である限り、この期の造形表現を問題にすることは、極めて重要である。

調査の目的と方法

幼稚園年長児から小学校入学当初の児童は、盛んにお人形さんとか、お友達とかを書きたがる。それを見ると、頭からいきなり足が出たり手が出たりする。その特徴の第一は、頭部が極端に大きいことである。時には1対1の比率である場合もある。第2の特徴は、手と足が小さく5本の指が書かれていない。腕の先と足先に丸い団子をつけているだけである。約40年前に農漁村の児童の絵について調査したところ、このことが明瞭に見られた。現代でもその傾向が見られるかどうか。さらに人物画として目鼻口等を含む顔の表現は、どのようなものか等に疑問を持ち調査することにした。昭和54年5月23日、愛知県稲沢市立稲沢西小学校の全児童に藁半紙半切を配布して「すきな人をひとりかいてください。」と出題した。用具は鉛筆で着色はしない。また、すきな人という語意の解説はしない。解説のしかたによって、表現意図や内容に誤差を生じ等質の資料となり得ないからである。調査はクラス単位として描画の時間制限はしない。

調査人員

学年	性別		計
	男	女	
1	82	107	189
2	84	85	169
3	92	79	171
4	94	75	169
5	90	78	168
6	88	87	175
計	530	511	1041

分析

(1) 人物のとらえ方 (表1)

イ. 全身と部分

大別して3種類となる。上半身を書いたものが最も多く63.5%である。次が顔だけ書いたもので、22.7%、全身のものは僅か13.8%であった。すきな人を書きなさいという出題では、特定の個人例えばお父さんとか○○君とかを書けばよいと判断し、記憶に基づいて書く心象表現が多い。高学年になると1部に友

達を見ながら書く児童もいた。従って上半身又は顔面だけにしぼられるのは当然と考えられる。全身像を書いた児童は144名、13.8%である。この僅かな数では単独に取り上げて統計的処理をしても普遍化された結論は得られない。予備調査として利用する程度のものであるから、今回は特に問題にすることを避けた。しかし全身を書いたものは、1年生に多く学年が進むに従い漸減していることは注目してよいことと思う。即ち描写するにあたって、特定の人物を書こうとしたものか、それとも人物を概念としてとらえているかということに関連するからである。人物を特定する要素としては、服装とか体格なども問題となるが、何と云っても頭髪の形状、目鼻口の表情等、顔や頭部を書かなくてはならない。低学年に全身像が多いということは何を意味しているか。おそらく次の理由によると考えられる。特定の人物描写、換言すれば肖像画を書くことが最も趣旨に沿うのであるとは考えない。誰でもよいから人間を1人書けばよいのだろうといった抽象化された人物像かと思われる。しかしイメージとして特定の人物であっても、印象が強烈でないため、特徴を書き得ないかも知れない。また印象は強くても技法が伴わないことも考えられる。高学年になると、主題から外れてはまずいという目的意識が強くなり、顔面に主体を置く。だから目標達成に効果的な構図をとる。

表1 全身と部分

学年	全 身				上 半 身				顔			
	男	女	計	%	男	女	計	%	男	女	計	%
1	19	32	51	27.0	37	50	87	46.0	26	25	51	27.0
2	16	27	43	25.4	53	50	103	61.0	13	10	23	13.6
3	18	8	26	15.2	57	65	122	71.3	17	6	23	13.5
4	4	5	9	5.3	70	57	127	75.1	19	14	33	19.6
5	6	8	14	8.3	56	55	111	66.1	28	15	43	25.6
6	0	1	1	0.6	52	59	111	63.4	36	27	63	36.0
計	63	81	144	13.8	325	336	661	63.5	139	97	236	22.7

ロ. 正面と横向き (表2)

小学校の1年生あたりでは、横向きの絵は希である。正面を向いて2人が並んでいるような図柄でも、お話をしている絵であるという。ここでも表2のとおり、横向きは1年で188人中たった1名である。2年でも7名(4.1%)である。もっともこれには、それなりの理由がある。面接法により60名の調査結果によると、27名はその場で見て書いたという解答を得た。次に横向きが書き易いというものが10名、まるみを出そう、鼻が出っはる感じを出したい、斜めを書くくと左と右のほっぺたが変ってごまかせられる等の理由がある。これらは立体感や量感の表現を意図したもので、技法に関連する理由である。また、いつも少女漫画を書くが正面を書く漫画になるからというものもある。何れも5年6年であって、人物の特徴をとらえようとする努力と、客観的態度でもものに迫ろうとする姿勢がよくわかる。また野球をしているから横向きにした。左に友達がいたから。僕と父と話をしていたから等は、知的判断によるもので17名あった。その中には低学年も多少含まれる。

これらの実態から横向きの絵は、例外なく何等かの意味づけがなされているということで、絵画指導上留意したい。描画では豊かな内容云々がよく問題となるが、横向きの人物が登場す

ると称賛される。クロッキーやモデルのポーズを観察させるのも、表現を可能にする手だてである。低学年児童には見ながら書き続ける能力が充分でない。見ておいて書くのである。父と僕と話をしている所を書こうというような条件を設定すれば、これは画面構成の具体的目標を持つこととなってより学習は深められると思う。

表2 正面と横向

学年	正面			横 向												総 計								
				真 横			斜 横			下 向		上 向		後 向					計					
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計			
1	82	106	188	0	1	1													0	1	1	82	107	189
2	80	82	162	4	2	6	0	1	1										4	3	7	84	85	169
3	87	76	163	4	2	6	1	0	1							0	1	1	5	3	8	92	79	171
4	81	72	153	6	0	6	4	3	7	3	0	3							13	3	16	94	75	169
5	69	74	143	7	3	10	13	1	14				1	0	1				21	4	25	90	78	168
6	80	83	163	1	0	1	7	4	11										8	4	12	88	87	175
計	479	493	972	22	8	30	25	9	34	3	0	3	1	0	1	0	1	1	51	18	69	530	511	1041

ハ. 横向きの左右

人物は左向きかそれとも右向きか。真横の他に斜め横も加えると、横向きの絵は64名である。そのうち左向き（左を向いている絵）が37名で、右向きが27名である。左向きが10名多い。右手を使って書くと左に向いているほうが書き易い。右向きの絵は左手がきの子が書いたのだろうか。残念ながらその判断となる資料が無いから結論できない。今回の調査では、左右の絵の数と学年差とは無関係である。ようやく物の形を描写し始める幼児では、左ききと右ききとでは、差があるかも知れない。因に、外国の有名画家の肖像画を調べてみた。95例中、左向きが45、右向きが50例であった。

世界美術全集 No.24 西洋19世紀（平凡社）

対象作家（アイウエオ順）

アンセルムフォイアーバハ・カリエール・クールベ・ゴーガン・ゴッホ・シャヴァンヌ・スーラー・セガンチーニ・セザンヌ・ベックリー・ホドラー・マネ・モリス・ルノワール・ルドン・ロダン

ところで正面向きを書いた児童は、972名で93.4%である。横向きは残り69名でたった6.6%であった。これを学年別にみると表2でわかるとおり、正面を向く絵が1年に最も多く、あと漸減傾向で6年で稍上向く。しかし問題にする程の傾向差は認められない。また性差についても同様である。

(2) 身体各部の表現

イ. 頭と髪

正面向きの972名について頭や顔の書きかたを分析した。まず頭と顔の輪廓をとってから頭髪を書き入れたものが590名（60.7%）あった。最も普通な表現である。次に形だけを書いたが、毛髪が書き込まれていないものが26.8%である。これは比較的1年に多い。また形をとらなくて毛髪だけを書いたものが106名で約11%を占めている。頭の形を曲線で現わし毛髪も含

まれているという表現である。児童の絵画を理解する上で留意すべきことである。書いてないから未完成であるとか、作業を中止した集中力不足の作品である等と判断したとすれば、早計に失する。

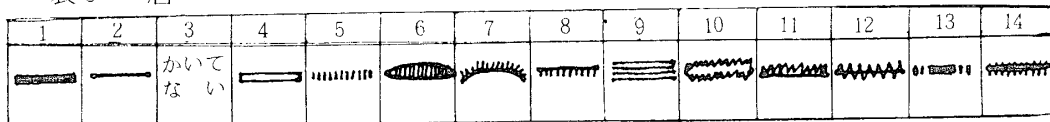
髪型は人物の年齢や性別、時には生活環境及び性格までも推測できることもある。描法もさまざまである。曲線を無数に並べたり、交差させたり重複させて面を構成する。その線の微妙な変化によって作者の性格が読みとれる。また線を使用せず面でもとらえる描法の児童もいる。ごく一部であったが着帽しているため頭部の書きかたが不明のものも見られた。野球をしているところなどがその例である。

ロ. 眉 (表3)

眉の形はそれほど種類は多くない。太い線若しくは細い線を横に引く単純であり、また当然と考えられる形が最も多く、625名で64%である。これには性差があって細く書いたものは女子である。眉の形は図でわかるとおり種々であるが、まったく書いてないものも93名(9.6%)もあった。これが低学年に多いことから推論して、眉は顔面の構成要素から除外しても支障のない存在かと思われる。低学年の児童は自己中心的である。表現はより心象的で、時に客観的な形や色を無視する。知的判断の網を通した表現である。そう言えば日本画で眉を書かない美人画を見かけたように思う。画家の絵も写実でなく写意であるかもしれない。

さて写実の目で見ると眉形もかなりの個人差があって、表情を特徴づける要素であるが、ここでは類型化されて口や鼻などに比べ種類が少ない。

表3 眉



学年	No.														計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
1	13	85	68	6			15	1							188
2	44	56	14	10	3	7	14	8		3	2		1		162
3	49	58	4	15	17	15	2	2	1						163
4	65	36	3	20	12	8	4	3				1		1	153
5	55	43	3	10	22	7		3							143
6	103	18	1	12	16	7		1	4			1			163
計	329	296	93	73	70	44	35	18	5	3	2	2	1	1	972
%	33.85	30.45	9.57	7.51	7.20	4.53	3.60	1.85	0.51	0.31	0.21	0.21	0.10	0.10	100.0

ハ. 目 (表4)

目は種類が多く63種である。No.12以下は頻度が少ないので図形だけにとどめたが(鼻口も同様)、これを分類すると紡錘形・円形・線形・長方形の4種類となる。紡錘形に黒い丸を記入したものと、紡錘形に白い丸を記入したNo.1とNo.2はよく似ていて、両者を加えると53.1%となる。つまり図の半数がこの形で占められている。基本の形をしている紡錘形は、図で見るとおり、種類が最も多く45種(806例)で82.9%となる。これを詳細に見ていくと変化の多いのに気

付く。まず瞳の付きかただが、上瞼から下方に向かって付くのが正しい。併しここでは瞼の上下両方に付くものや申し訳程度に片隅に僅か書かれたもの等、種々である。また全く瞳の認められないものもある。瞳と眉の兼用かと思われるものもあった。

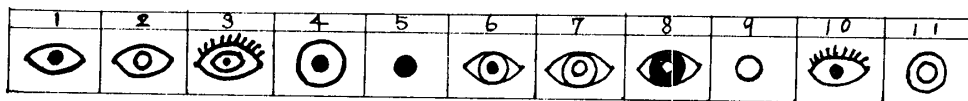
次に瞳であるが黒く塗りつぶしたものと、円を書いて白く塗り残したものの2種がある。いずれにしても1個を常態とするが、2個又は3個記入されたものもある。並べかたも様様である。これらは漫画によく見られることで恐怖・驚愕・威庄等の感情を強調する技法かと思われる。また瞳を星状形に書く例では、写実の類型から脱皮したい意欲かとも考えられる。むろん児童の創作ではなくて漫画本などの模写であろう。二重瞼は理知的であり、瞳が片方に偏っていると愛嬌があり優しくスマートに見える。

円形の目はNo.4・5・9・11等9種類である。単なる黒丸と白丸を基本形として、2重の同心円、3重の同心円がありこれに瞳を加えて単純明解な図式となる。いずれも抽象化が目立ち人物像としての個性を感じない。

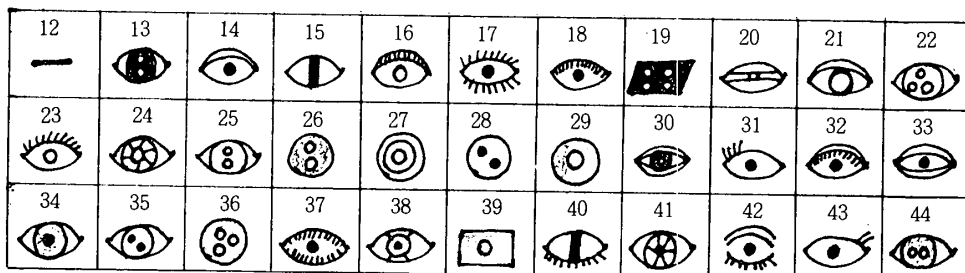
線形は特殊な場面を想定している。眠っているとか、考え事をしているなどである。もっとも低学年では、眼っっていようが開いていようが記号であるから解釈は厄介である。(No.12・53・55)

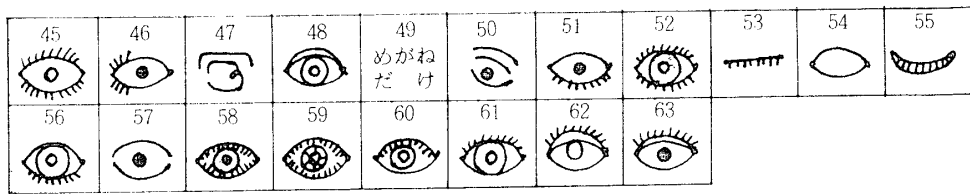
長方形のものは写実の目からすれば想像の及ばぬ形である。(No.19・39) 漫画の模倣であろう。因に写実の目の正しい形を示しておく。全体の外形は、紡錘形で瞳は中心が黒く円形である。その外側に稍茶褐色の同心円がある。更にその外側に縁どりのような形をした黒色部分がある。これだけをまとめて瞳という。正解図は6年女子に2名であった。

表4 目



No. \ 学年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1	52	13	47	9	37	3			9		5
2	63	16	41	8	8	1	1	5			5
3		62	23	58	1	8	1		3		
4	56	48				5	7	1		9	
5	75	33				7	5	4		1	
6	59	40	1			6	13	16		2	
計	305	212	112	75	46	30	27	26	12	12	10
%	31.38	21.81	11.52	7.71	4.73	3.08	2.77	2.67	1.23	1.23	1.02

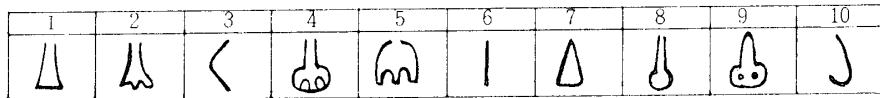




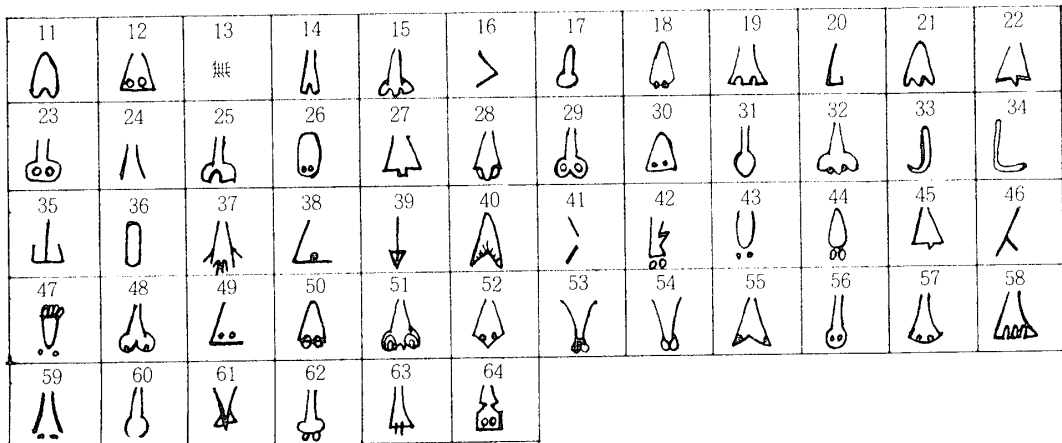
二. 鼻 (表5)

鼻は64種類である。鼻孔の有無やNo.6のような線形及びその他に分類される。線形以外は種類が多く興味のあるところであるが、4年以上に限られている。線形は3年以下でNo.3・6・10・16・20・24・33等12種類195名が該当する。これらはいずれも単純形で、高学年へと複雑な形となる。ここでは性差が認められる。男子は俗にいう団子鼻で女子のそれは流線形である。(No.4・8・9・23)(No.1・14) 流線形の鼻には、鼻孔が書かれないのを通例とする。もっともこれらは、3年に顕著な傾向で6年になると隆起状態の立体的表現に神経を使ったり、個人差のある形を個々に見てもかなり注意力を集中させた形態である。従って類型化された団子鼻や線形は減少する。

表5 鼻



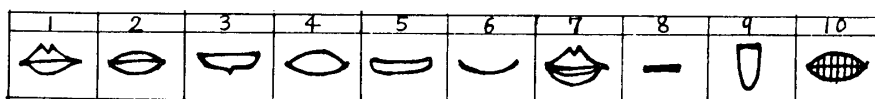
No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1	9	1	47	6		27	12	9	9	4
2	11	17	48	22		5	9	4	14	3
3	29	24	14	24		1	7	5		
4	44	52		23	9					7
5	47	41		18	5			5		6
6	45	43		15	31			4		
計	185	178	109	108	45	33	28	27	23	20
%	19.03	18.31	11.21	11.11	4.63	3.40	2.88	2.78	2.37	2.06



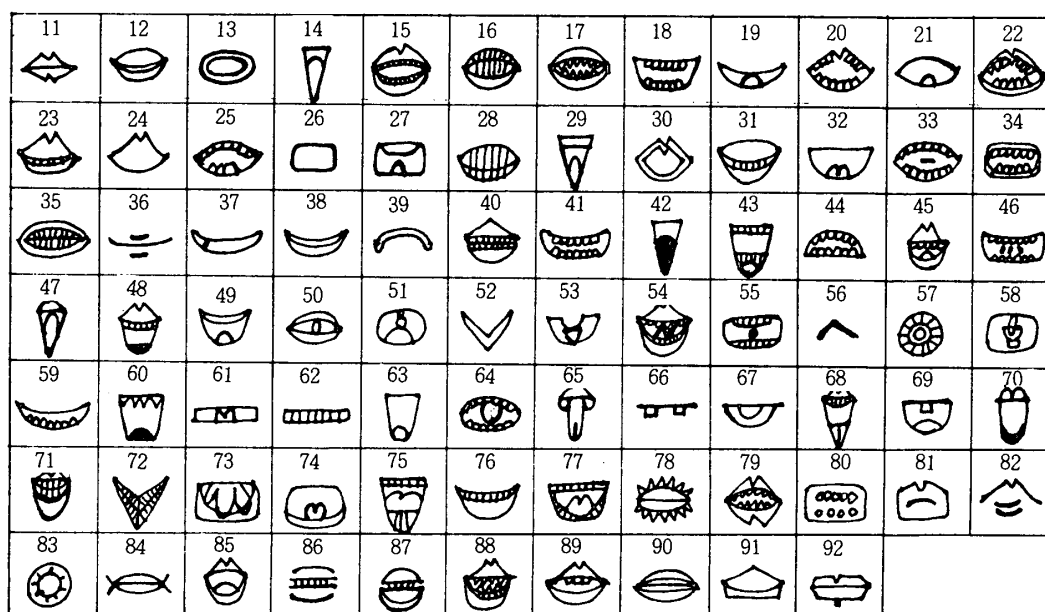
ホ. 口 (表6)

種類は93種で顔の部分中最も多く唇舌歯の形状とその組み合わせにより多種類となる。最もノーマルな形はNo.1で335名で34%となる。これを学年別にみると、低学年から逐次多くなっていく。この形は言わば実景といったところであるから客観的な観察力がつく高学年程、数が多くなるのは当然である。またNo.6・8など単純な形を集計すると1年が特に多く高学年に少ない。これは上記と反対である。ものを単純化し記号に置き換える主観的思考は、低学年児童に共通する傾向である。また歯や舌など判別しにくいものがあり記号的要素が強い。これらの中には、単純化されながらも感情や表情が巧みに表現されているNo.19・65・70等がある反面、無表情で記号としか解釈できぬものもある。またNo.41・46・79の如く粗暴で野性的な形、それとは対象

表6 口



学年	No.									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1	10	14	67	6	10	21		7	8	1
2	30	21		23	8	5		8	5	
3	50	47		16	11	3	1		1	
4	71	40		4			3	2	3	5
5	80	22		6			10	1		1
6	94	23		5	1		10	1		4
計	335	167	67	60	30	29	24	19	17	11
%	34.47	17.18	6.89	6.17	3.09	3.09	2.47	1.95	1.75	1.13



的に柔和で女性的な形も見受けられる。装身具の耳飾や首飾を連想するNo.51・58はその例である。

歯の確認可能なものは、33種類である。頻出度に低学年高学年の差は無いから発達段階とは無関係と考えられる。食事とか対話などの場面を絵にしておれば、歯を書くこととなる。しかし肖像画的扱いであれば、その必要はない。

次に舌を書くことは技法上にも困難な面があり、テーマ設定上必要に迫られることも無いためか作例が少ない。それに加えて唇との判別困難なものもある。しかし僅かではあるが舌と歯と唇とを書きわけたものがある。複雑な形態であるが、低学年高学年いずれにも見られる。形態の美とよく整理された構成美もあって、児童の作とは思われず創作能力や表現力を問題とするには疑問が残る。No.43・45・55・89等で複合形態なる語句で総括しておいた。実に巧みでデザインとしての価値が高い。

最後に性差についてであるが、口の種類を男女別に集計すると男子127種、女子85種である。表7によると、他の部分もほぼ同様である。種類が多いことは、思考の幅が広く創造的であると解釈してもよさそうで、男子が女子よりも勝れる。

表7 種類別1覧表

学 年	眉			目			鼻			口			合 計		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
1	6	4	10	10	12	22	22	17	39	28	17	45	66	50	116
2	11	9	20	14	11	25	22	17	39	30	20	50	77	57	134
3	9	8	17	8	10	18	19	25	44	18	16	34	54	59	113
4	10	7	17	9	17	26	12	7	19	19	9	28	50	40	90
5	7	6	13	10	14	24	14	10	24	12	13	25	43	43	86
6	7	9	16	17	14	31	9	10	19	20	10	30	53	43	96
計	50	43	93	68	78	146	98	86	184	127	85	212	343	292	635

結 語

調査資料に基づく分析を要約すれば、次のとおりである。

1. 目鼻口等の各部分の書きかたは予想に反し極めて形態上の種類が多く、口の形は212種類もあった。少ないものでも眉の93種類である。いずれも相違点が少しずつあって類型化が困難である。
2. 作画の傾向は低学年が主観的、観念的で図式化がめだち、高学年はそれと对象的に客観的で具象画風である。
3. 低学年には特に性差が認められる。男子の絵は野性的で無骨である。女子のそれは優美でしかもスマートに見え現代感覚に調和する形象である。
4. 図式化された個々の作品は、漫画等の模倣かと思われるものが多い。

模倣を知識習得のための有効な経験とし、また創造思考の糧とするには、児童の絵画をどのように理解したらよいか。教育的配慮が望まれる。

参 考 文 献

- 1) 子どもの美術 2 幼年期の指導 美術出版社 (1956)
- 2) 扇田博元：絵による児童診断法 黎明書房 (1957)
- 3) 中西良男：児童画への理解 教育美術振興会 (1959)
- 4) 美術教育の調査と研究 月刊誌「教育美術」特集 (1968)
- 5) 井島勉：美術教育の理念 光生館 (1969)
- 6) 子どもの造形 1 月刊誌「教育美術」特集 (1970)
- 7) " 2 " " " (")
- 8) " 3 " " " (")
- 9) ローダ・ケロック：児童画の発達過程 黎明書房 (1971)
- 10) 磯谷桂治：やる気と児童画 " (1978)